Sports なんだろう？

ラグビー編

35歳・3人の子持ちがなんでいまだに現役なんだろう？

文／大友信彦（おおともの ぶひこ）
1962年宮城県気仙沼市生まれ。ラグビーを中心に取材を続け、著書に「再起へのタックル」（洋泉社）など。「Number」「東京中日スポーツ」などに執筆中。

ラグビー日本代表・村田亙（わたる）〝不屈の挑戦者〟

英国で古くから行われていた原始フットボールを母体にして、19世紀に分かれた兄弟スポーツがサッカーとラグビーだ。しかし、サッカーのW杯が1930年の第1回ウルグアイ大会から昨年の第17回韓国大会まで73年の歴史を持つのに対し、ラグビーW杯が始まったのは1987年。今年10・11月の豪州大会は、やっと5回目の大会なのだ。競技成立の直後からプロ選手が誕生したサッカーに対し、ラグビーではアマチュアの理念が根強く、ホーム＆アウェーの交流に終始し、世界規模の大会はなかなか誕生しなかった。プロの選手が国際ルールで認知されたのさえ1995年、たった8年前のことである。

それゆえ、1970年代に世界最強と謳われたウェールズが、80年代に世界を席巻したフランスなどの強豪国も、いまだW杯の王座についていない。過去4回のW杯の頂点を掴んだのはニュージーランド（以下NZ）、オーストラリア（以下豪州）南アフリカ、そして豪州の順。優勝はすべて南半球勢、しかも歴史的には南半球に後れを取っていた豪州が優勝回数でリードしている。

そんな事情だけに、ラグビーW杯のレコードブックには、後発組も名前を残すチャンスがある。例えば、W杯で過去4大会すべてに出場しているのはこれまでたった1人。カナダのガレス・リーズという選手だ。'87年の第1回W杯に18歳で乗り込み、'99年の前回大会には31歳で出場した。リーズはイングランドのプレミアリーグで得点王に輝くなど、国際的に知られた選手。とはいえ元世界記録の持ち主が、NZやフランスなどのラグビー先進国でなく、カナダから生まれているのは何だか面白い。

そして今年10月の第5回大会。日本にもこの「世界記録」に並ぼうとしている選手がいる。今年1月に35歳の誕生日を迎え、現在ヤマハ発動機でプレーするスクラムハーフ村田亙である。

村田は福岡市の名門ラグビースクール「草ケ江ヤングラガーズ」で、小学一年から稽門球を始め、東福岡高から専修大を経て東芝府中に進んだ'90年には優先を買われて日本代表入り、'91年の第2回大会から'95、'99年第4回大会までW杯に3大会連続出場。今年の第5回大会に出場すれば、リーズと並ぶ「世界記録」保持者となるのだ。

国内では'96年度から、東芝府中を代表監督を外してオファーがあった。'96年に日本代表を指揮した元豪州代表のグレン・エラ臨時コーチからは「オーストラリアのクラブでプレーしないか」と誘われた。同年東芝府中からNZへ3ヵ月間留学した際も、リーンウッド・クラブをカンタベリー州バイヨンヌと契約したのだ。

ところで、プロになった当時、村田の年齢は31歳。前期5年目の妻・理奈さんとの間には長女が生まれたばかりの。世の普通のオヤジなら、「妻子のために安定した生活を」とハラを括り、自分の夢に区切りをつけそうな時期だが……この男の発想は違っていた。

「プロ選手になれば、会社で仕事をしない分、家族で過ごせる時間がとれると思うんです。それが楽しみなんです」渡仏前、村田は目を輝かせて言っていた。何より、前年に生まれた長女につけた名前からして「夢翔（ゆめか）」――夢に翔く――という名なのだ。もはや、誰もこの男を止めることはできまい。

「帰ってきてからの日々は何もない。でも、このチャンスを逃したら一生後悔するんじゃないかと思ったんです」

そう言ってフランスに旅立った村田は、先に紹介したように監督なデビューを飾り、フランスのラグビー専門新聞「モディ・オランピック」が選ぶ優秀選手の常連になった。そして2001年、東芝府中時代の恩師・向井昭吾監督が日本代表の指揮官に就任したのを機に、2シーズンのフランス生活にピリオドを打って帰国。ヤマハ発動機に入社し「4度目のW杯出場、本大会での勝利」を新たな夢に据え、新たな挑戦を始めた。

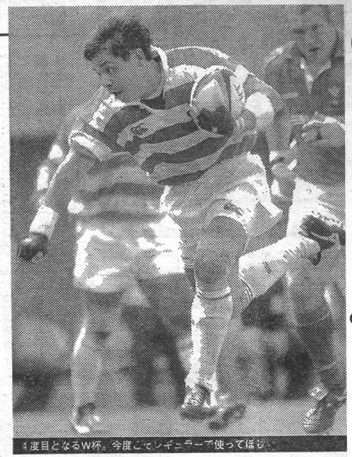
2年ぶりで日本に復帰した村田は当初「ザイドアタックに行かなくなった。スピードが落ちたのかな」という声も寄せられた。

だが実は、それも2年間のフランス経験で得た収穫だった。

「フランスではハーフがチームリーダーなんです。確かに、自分で行く回数は前より減ったかもしれないけど、肝要なときは行くし、フォワードを動かす技術とディフェンスは成長したと思う」

その意味が事実だったことは、9月からの国内シーズンで証明された。村田が加わったヤマハ発動機は、史上初めてトヨタ自動車を破るなど関西リーグで神戸製鋼に次ぐ2位まで躍進。翌'02年には神鋼をも破って全勝優勝まで飾ってみせた。アタックの起点となってパスを送り、ディフェンスの狙目を出しながら自らもハーフのタックルを繰り返すフォワードの15人全員を統率し、鼓舞してチームを勝利に導く姿は、ナポレオンのごとき将軍と呼びたくなる存在感。その体躯からは、若手のハーフには望み得ない、重力のようなオーラが発散されている。昨年のアジア予選では圧勝を続けたジャパンだが、W杯本番は過酷の戦いへ。だからこそ、ラグビーに厳しいプロ生活を送り、逆境に強い男が頼りになる。

村田と同じ35歳といえば、サッカー界にはゴンこと中山雅史がいる。ヤマハはジュビロの母体であり、本拠地も磐田。'01年に村田がヤマハ入りすると、2人の背番号9はたちまち意気投合し、今ではジュビロ「一緒に汗を流す。1年前は言い合いばっかりだったのに」と言う。2003年、今度は彼のジャージが、列島を熱狂させる番だ！


4度目となるW杯。今度にてレギュラーで使ってほしい

男35歳。サッカー界にはゴン、そして、ラグビー界にはワタルがいる！

選手権プレー・ファイナルに導き、「帰国を海外として試合に出てくれと」引き留められ、その決勝では「トライ1アシストの活躍をみせてMVPに輝いた。そして'99年W杯後に東芝府中を退社し、日本人で初めてのプロ・ラグビー選手としてフランスの

ライバルたちが次々引退していくなか、いまだ可能性を感じさせる希有なプレイヤーだ

日本選手権3連覇に導いた。相手チームとのスクラムの際に、チームを勝利に導くだけでなく、日本人がなぜこのスポーツで世界に挑み続けるのという疑問への答えでもある。迫りくる巨大なカラダの隙間を、鍛えあげた強靭な肉体とパワフルな瞬間、一髪擦り抜ける爽快感――ジェームズ・ボンドやインディ・ジョーンズのような冒険心溢れる、ピッチの上で現実化してくれるのだ。

そして村田は、プレーだけでなく生き方そのものでもチャレンジを繰り返す冒険野郎なのである。前回W杯終了後の1995年11月に東芝府中を退社しフランスの名門クラブ・バイヨンヌと契約。日本人で初めてのプロ・ラグビー選手となると、渡仏直後の「プロテストレー戦」では試合開始から僅か1分に電光石火の先制トライ。地元スタジアムに詰めかけたファンのハートを一気にワシ掴みにした。以後、ヨーロッパのプロリーグに身を投じた日本人ラグビー選手は吉田義人（コロミエ＝フランス、2000）岩渕健輔（サラセンズ＝イングランド、2000）斉藤祐也（コロミエ＝フランス、2002）大畑大介（モンフェラン＝フランス、2002）と増えていった。事実に、村田の果たしたパイオニアとしての大きな役割が表れている。

そして、村田は、どんなに逆境に立たされても諦めることを知らない、不屈の男である。

村田の選手生活は、度重なるケガとの闘いだった。'90年2月、日本選

写真／アフロフォト デザイン／西村隆